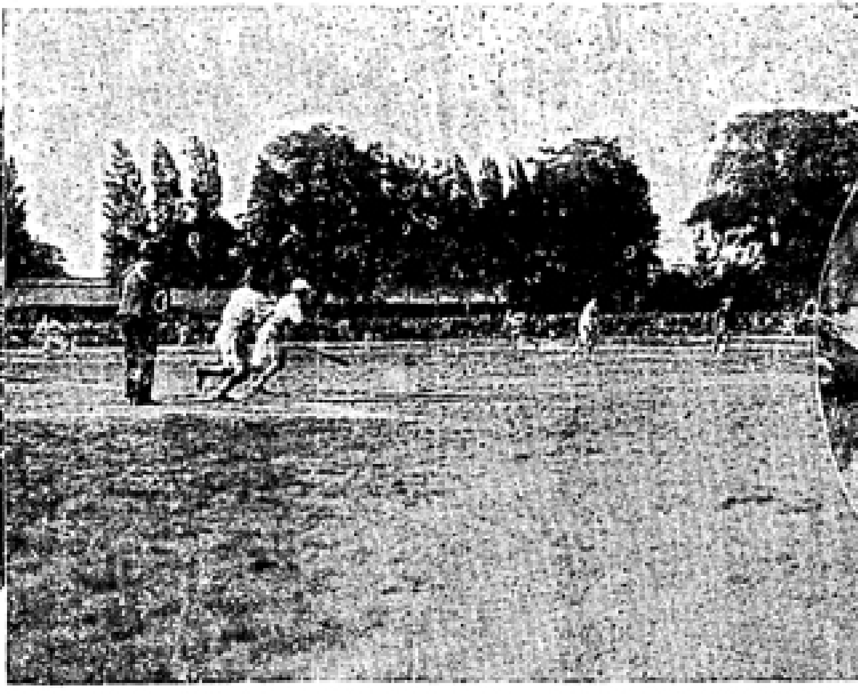
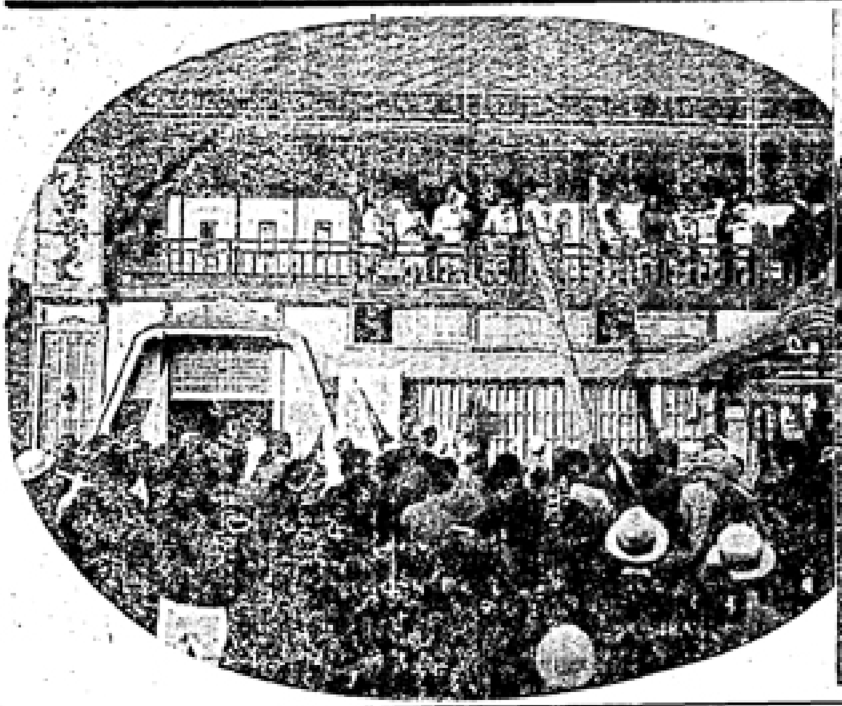




逐に破る北大の堅壘 光榮燦然たる綠丘軍

白戰の史此處に十有一度 戰勝正に七度を重ぬ

嗚呼、連戰四敗の憂目に屈すべきか、將た又勝ちて大塁の破綻を暫し延すべきか。北大軍の陣營は逞しき迄に緊張して、未だ戰はざるに殺氣將に滿たるものがある。

是より先連戰連勝の榮譽を荷ふ高商野球部は數千市民の熱烈なる行の喚聲を後援の聲援に殘して選手團は共に必勝の意氣は打つて一丸さなり折柄漸々たる石狩川の風に男兒の意氣を表徵する眞紅の旌旗を翻かせつ・午前十一時さ云ふに早くも戰場の地には到着した。

此の日天氣晴朗、東風あり。三春の苦練辛しかるべきも、連年の屈辱此處に雪ぐべきも總ては懸りて此一戰に存す。一塁側に陣を布きたる高商軍、三塁側に白旗を林立せしめたる北大軍相共に陣を持して放たず。山田時に移らんさする前一瞬の沈默寂さして凄愴を極む。水谷球審は遂に戰ひを宣す。轟然たる兩軍の應援歌は耳朶を聾し必死の色兩軍選手の面上に紅潮して漲る。時に午後一時五十分。

試合經過

◇第一回（高商）先攻）種田遊ゴロ一壘に生き青木凡死木左飛　種田三壘に進むも西田凡死▲（北大）星野四球を利し二度の敵失に生還伊藤三振◇二回（高商）林二ゴロに出で阪田のフライに併殺伊藤死球加地三振▲（北大）濱田一遊失に生き敵失に二壘に進む森田鳥尾三振山本二ゴロ。◇三回（高商）松村中堅安打種田二壘を盜み青木三壘に擬飛して立木左堅に三壘打を飛ばし松村生還、西田四球林内野飛に濱田三壘安打に立木生還伊藤加地三振▲（北大）平岡三壘打し星野の犧打に生還齋藤三壘打九尾四球に齋藤生還伊藤濱田三振◇四回（高商）松村種田の二邪に死し種田二盜青木立木三振▲（北大）森田中飛鳥尾三振山本一飛◇五回（高商）西田遊ゴロ阪田三壘失と一邊球に林生還加地三邪死松村中飛死▲（北大）平岡星野三振齋藤投犧死◇六回（高商）種田三振青木左三壘打立木左二壘打に青木生還林中飛死▲（北大）三者凡退◇七回（高商）三者凡退▲（北大）森田三壘安打三盜鳥尾穩打山本投手に中邪飛死◇八回（高商）松村安打種田捕飛死後二盜敵失に生還青木三振立木一邪飛死▲（北大）齋藤丸尾凡死伊藤三振失に生き二盜濱田二遊失に前者三盜森田の安打に生還鳥尾三振◇九回（高商）西田中飛林左飛死阪田三遊死▲（北大）山本平岡三振星野中堅二壘打して出づるも三壘に刺さる。時に午後四時四十分戰を六對五にて高商軍に凱歌揚る。

高商		打數	得點	安打	犧打	四死	三振	盜壘	失策
種田	8	5	0	0	0	0	1	1	0
青木	2	5	2	2	0	0	3	0	1
立木	6	5	1	2	0	0	1	0	0
西田	3	4	0	0	0	1	1	0	0
林	1	5	1	0	0	0	1	0	1
阪田	7	5	0	1	0	0	0	0	0
伊藤	5	3	0	0	0	1	0	0	0
加地	4	4	0	0	0	0	2	0	2
松村	9	4	2	3	0	0	0	1	0
		40	6	8	0	2	9	2	4

試合時間2時50分　球審水谷　壘審砂淨

投球數、林 132　鳥尾 127

暴投、林 1　鳥尾 1

殘壘、本校 5　北大 6　併殺伊藤—星野

二壘打、立木、星野、

三壘打、立木、青木、平岡、丸尾、

北大		打數	得點	安打	犧打	四死	三振	盜壘	失策
星野	3	4	1	1	0	1	2	1	1
齋藤	5	4	0	0	0	0	1	0	0
丸尾	6	4	1	1	0	0	1	0	3
伊藤	2	3	1	1	0	1	1	1	1
濱田	4	4	0	0	0	0	1	0	1
森田	7	4	1	2	0	0	1	0	0
鳥尾	1	3	0	0	1	6	3	0	0
山本	9	4	0	0	0	0	2	1	0
平岡	8	4	1	1	0	0	3	0	1
		35	5	6	1	2	15	3	7

戰の跡

一般に高商は打撃に強く北大は守備に粘りを見せた技量は伯仲實に意氣さ意地の戰であるだけに二回負越の北大側が非氣味に不利な戰を續けたのは止むを得ない北大は敵失に点を入れ高商は松村種田青木立木等のヒットエンドランに得点を加へた想ふに八回目表に於ける北大側唯一のエラーである捕手の二壘惡投が主なる敗因である。之無くば恐らく補回戰に入つたらう。秋季戰は十月初旬であるが連戰四敗の北大軍には負けられないシーズンである。林投手の內角を通す怪球を何の程度迄打こなすかが北大の勝敗に大いなる原因をなすものである。

苦米地教授病まる

赤岩山上グラウンドの地均工事總督、寳金調達等に殆ど不休の奔走を續けられた校友會總務苦米地教授は平素の御心勞一時に發して去る十四日に病臥せられた。御經過良好で廿三日より御登校せられて居るが未だ充分の御全快ではなく御顏色も頗る惡い。學園の內外多事の際切に同教授の御健康を祈る次第である。

假講堂に學生大會

運動部の遠征について

去る廿五日放課後來るべきシーズンに遠征活躍すべき運動部決定の爲講堂に學生大會が催された出來得べくんば各運動部全体を遠征せしめ度いさ云ふ事は一般校友の意向であるが其間には經濟的關係諸事情も存して判定意見の一致を見ざる處なれば豫め理事會に於て決定されたる野球、庭球、劍道弓道の四部中何れを遠征せしむべきかを投票を以て決する事さなつた。因みに廿六日の一般投票の結果投票總數は二部さなり各部得票は劍道部三〇二票庭球部二四六票野球部二〇二票弓道部一四五票さなつた。かくて本年度遠征部は劍道部及庭球部さ決した。

全道の榮冠を握り弓道部の覇業成る

殘るは全國の覇業

先に北大弓道部に惜敗して僅氣やる處なかりし弓道部は去る廿日小樽弓道會臨時分遣場に催されたる全道射大會に三十射二十中さ云ふ素晴らしいレコードを以て優勝した。湯上實勝は大平射撃會長より優勝ペナントを受けて學園に保管して居る。因に實業團優勝チームは曾て學園に二戰二敗した札幌クラブであると云ふ事由。

善戰努めて逐に及ばす柔道部敗戰す

具體さ汗の合宿その四十日を終へて自信さ新氣に溢る・心を抱く十五名の選手は去る十三日の對北大戰に善戰努め遂に矢折れ彈盡きて敗れた。奮戰の闘詰さ大將中村君の負傷が主たる敗因さ見られた。何はあれ勝敗は兵家の常である、校友先輩は等しく部員の努力さ健闘さを謝て居る。須らく來るべき年の爲に備ふべきである。戰ひ已に終りて將校々さ練習を忘らざる柔道部を吾人は敢て一千四百の校友に紹介せんさするものである。

洋服
洋品
中花園町
一越へ

者は次の如し。
藤田教授　實方正夫　佐伯次郎
月坂　信　浦　一郎　長井一榮
矢島齋一　佐々木鈔二

柔道部第五回聯合會は七月五日フオキヤ樓上に催さる・筈なれば多數部人の出席を希望する。

（柔道部連日の猛練）

馬術教練は九月三日より

七月十五日より行はる・筈であつた馬術教練は軍隊側に依り種々都合上遂に九月三日より行る・事に延引された。從來の寄宿者の他に新規申込を歡迎する。費用は食費さして六圓を徵收する。

久潤の集り綠丘短歌會

樓上にて

殆ど一年振の集まりであつた。會する者八名、短歌批評、歌論等百出し夜の更くるを忘れた。生活を等しくする連中許りの集まりだけに和氣靄々、如く近來になく氣持の好い會であつた。當夜の出席

再び學生大會

商學討究の購讀に就き

去る二日金曜第五時限目緊急に提さるべき『商學討究』誌の發行援助の件につき學生大會が催された。同日は幹事長の出席あり[illegible]經費問題を校友會の一事業さして議論する事、從つて校友會費を年額一圓だけ増額する件は満場一致を以て可決を見、一時三十分散會した。

輕快なお召物は　妙見河岸　小林へ

眞摯の學風と丘陵街にあくがれ來る者の心

諸君の前途は銀行や會社に限られてはならぬ

十藏寺宗雄氏談

法學博士商業學教授十藏寺宗雄氏を訪問する。御宅の扉が却々開かぬ。御不在で散步に出てるかな？さ思つて、諦めて歸りかけるさ格子戸の邊に和服を着こなした同氏の姿が飄然さ現はれた。御勉強中らしかつたので邪魔だつた顏さ若干の躊躇すら面かし訪問記者さして責任上已むを得ない。座に着くや否や質問の矢を放つ。

學生の印象？私には格別そうさも見ないが先住の教授方が在仰はる小樽の學生が不勉強では困るね。私は歷史を感じるあり、學校にも街にも個性がある。川や水の明つた街には天狗の行人が石地心行くまで感じられる。漸々北へ來た甲斐があつたさ云ふものさ。

× ×

此處の綠丘にはあらぬ噂を立てられて恐れ入つた。あれは全然何かの間違ひらしい。何處から彼んな噂が出たか不思議に思つて居るのですが東京日日に名が出た事は實に偶らしい。畫入りの商人もそんな事こそを言つて居た樣だ。兎に角改めて御訂正を願ひ度いね。

× ×

小樽は地勢的には確かに適して居る。而し夏が涼しくて好いではないか。この氣候を利用して吾々高商が社會に特殊的な地步を占める樣に努力しやうぢやないか、學生教授先輩が一丸になつてさ。

× ×

それにつけても諸君の前途は單に會社銀行のみに限られては不可い。學者新聞記者行政官司法官外交官何れにでも向ふべき時代である。社會は一般に財政的手腕ある士を要求して居る。途が法科萬能である時代は遠く過ぎ去つた。文官高等試驗の規則も昨年來改正されたから本校學生の希望者には大いに便宜になつた筈だ。私は本校の卒業問題にはもつさ考慮の余地が存る樣に思ふ。勉強の時間が足りぬならば豫學試驗を延長した方が好い。學者になる人を除ぞいては諸君の大學行きを私は極力お留めしたい。學士號を持つ必要認めないからです。諸君が高校を横ばすして一歩早く社會へ打つて出る爲に本校に入られたさしたならば出來るだけ早く社會に飛び出して頂き度い。早く實のある仕事をして頂き度い。若し大學卒業者さ同資格を得たいさいふならば論文に向かはれたが好い。

× ×

どうです？私の講義は解るかね。京都に居た時分は講義の事情が異つて居たから今迄は余り苦まなかつたが今は全く序論を[illegible]。學問を試驗の爲に詰込む樣な事は嫌ひだ。『學問は藝術』さ云ふ自由な研究をして好いね。[illegible]今年の夏は[illegible]北海道內地を經る事に約束してあるがどうなるかね。同意を許ましたら何處かへ子供でも連て出掛けたいさ思つて居る。

× ×

時間も大分經つた。京都訛の濃らしいお構ひが學校のお噂ひに余念ない顏を靜けに遁つて辭し去つた。

今年度修學旅行方面は支那さ樺太

樺太は十五日出發 支那は廿一日出發

本年度修學旅行を實施する學生五十名は來る七月廿一日門司出帆中部支那方面に修學旅行を行ふ。引率者は支那語教授原園武氏である。旅行日程は次の如し。

日程、七月廿日門司集合廿一日出帆、廿二日船中、廿三日上海到着、廿七日上海南京着、廿八九日漢口着、八月二日漢口發四日北京着、八日北京發九日天津着、十二日門司

參加人名次の如し（順不同）

岩井秀三　高木政治　相馬直一
早川和男　辻　信雄　佐竹富初
西尾惣三郎　中野新八郎　坂井直人
木內良敏　永瀬政雄　柴田昌治
安藤和一郎　工藤文平　森定治
富山俊道　小島敬藏　平井義章
岡田政次郎　上坂一郎　宮村乾俊
大沼福治　小堀良平　杉山秀雄
樋橋富治　新井章一　石田熊一
水野哲

尚樺太方面修學旅行日程は目下未定なるも西海岸より東海岸に出づる計劃なる由。旅行通過地方校友諸兄の御援助を乞ふ。

庭球部惜敗

スコア五—四

去る廿日庭球部は本校コートに北大軍を迎へて戰つた。ダブルは三—一を以て敗、シングル又始め調子良く二對二を以て綺を顯したが最後の二者相次で敗れ遂に五

新會員諸氏へ

御住所や御勤先を未だに御通知下さらぬ方が非常に多數御座いますので本部では種々な事務の遂行上不便極る次第ですから至急御通知下さる樣御願致します。

同窓會本部

同情すべき野球部の自費遠征

過般學生の一般投票の結果遠征の權を失ひたる野球部は其の冷々たる鬪志を抑ふるに耐へず遂に選手は自費遠征を成すに決した。目下の遠征に二度の遠征を云ふ赫々たる部史を有する同部さして見れば無理からぬ事情であるが、此際校友學生は何等かの援助を以て同部の遠征行を壯ならしめ度いものである。

本道の嚆矢ラ式蹴球戰

北大さミックス

我校蹴球部は北大蹴球部さミックスで去る六月廿六日北大グラウンドにア式蹴球戰を行つた。試合は緊張し選手三浦文雄君はキックを受けて活躍するに至つた。同部對北大蹴球の對抗戰は同十四日小樽公園グラウンドに催されたが九對零を以て北大敗戰した。敗因はチームワークの欠陥にあつた樣だ。

好評嘖々の取引所論

講師は取引所伊藤理事

一四を以て敗れた。

三年の取引所論は例年の非常講師大藪氏に代はり小樽取引所常務理事伊藤繁藏氏を招聘して、六月廿八日から七月十日迄隔日毎に於て講義が行はれる。絶好なる講義さ

洋式帳簿
諸式一切　太陽舍印刷所

新人歡迎のソサエテイ

外語部の催し

多數新人を迎へて外語部は去る九日今年度第一回イングリツシユ・スピーキング・ソサエテイを催した。實方君の開會の辭に始まり樺山君、高橋君、前島君等の水の如き雄辯に珍しく野次など飛びて活氣を呈した。會衆約百、此種の催しさしては稀に見る盛會の部である。高木君の閉會の辭に午後四時散會。

◉三寮三菱を破る

櫻田西田御嶽名寄尾山村田等の一流の選手を擁する三寮野球部は過日公園グラウンドに三菱野球部さ對戰した。結果は秘戰に接戰を極め十一對十のスコアにて三寮勝つた。

◉劍道獎勵會

劍道部は去る六月六日學園道場に劍道獎勵會を催した。集つた團體は府中商、商北商、水產、余市中學等で頗る盛會を極めた。齋水氏其他先輩の出席もあり、試合後茶菓の饗應があつた。

綠丘ゴシップ

支部旅行決定す。[illegible]

見出すこと甚尠一名。成程語學は國民性を闡發する。

× ×

北方文藝は同人の戀愛模倣であるさの世評專らである。誰か大いに奮起して武勇傳の一篇なさもものするものなきか

× ×

第八期卒業會員廣川鉦太郎氏の殺人事件持上る。願はくは嫌疑にて終らむことを。

× ×

學園教授諸氏の努力により『商學討究』愈々生れ出づ。『浮遊する學園より固定したる學園へ』南大先輩の言に悖るなかれ。

× ×

學生ホール入口の書籍展覽會！！さ思はれる程の各部各會の檄文や廣告貼紙の賑しさはどうだ。中には・もう澤山だ解つたよと言ひ度いのも有る。

丘上雜話

—丘の詩人、蒔田先生に—

長井一榮

日は早い。いつの間にか春が去り夏が來て、今年ももう半分過ぎてしまふ。斯うして自由と良歡の丘の生活が、情けもなく消えて行く。若い純情と純熱と誇りが、跡かたもなく滅びて行く日が淋しい。私には少くとも私には此の緑が丘の生活は一生を通じての愛着と追憶の中心なのだ。淋しく微笑み、力強く肯定して來た私の青春の夢と憬れの大方は、この緑が丘に埋められてゐる。丘、丘。私の胸は此の緑が丘を思ふ時、若き日への未練と執愛の心で一杯になる。

×

過去拾五年間の、或ひはそれ以上であつたかも知れない私の學校生活は、行、小樽で終られた。裏日本の陰惨な　泥の寛い一港街に生れた私ではあるが、空想と憧憬の少年の日の大部分は、此の小樽に育まれ、朽ちて行つた。小樽。小樽こそ私の第二の故郷だ。

異し、自分の存生を自覺し　異性を認識したのも、人間に目覺め、自己に對したのも、かつてのニイチエの如く、人生と自己とに對して眞面目な素朴な信仰と慾求を失つて、懐疑的な思想の彷徨と動揺とに泣き絶望と不安とに淵らて、死を企てたのも皆んな、小樽だ。小樽は喧噪の街だ。商業の街だ。然し小樽は私を人間にしてくれた。私はたまらなく小樽が好きだ。小樽は私を昂奮にし、又は戦激させ、時には希望を與へて呉れる。私は小樽を讃愛する。私は小樽を歌ふ。私は限りなく小樽を讃へる。

×

悩みも浪らひも、苦痛もない夢の日の追憶は、生々しく私の胸に蘇つてくる。私は稲穂小學校に學んだ。一年生か二年生の天氣のいゝ日だつた。パラソルをかざした美しい女の先生達に引卒されて此の地獄坂を登つて、今の新設グランドの邊りで鬪蛮を聞いて遊びほうけた頃の記憶を、私は辿ることが出來る。六年生の頃、丈の高い絹の先生に連れられて、菖年をしに山へ來たこともあつた。そんな時はいつでも此の學校の前を通るのだつた。十二、三、四の頃、友達と幾度、山遊びや山葡萄を採りに此のダラダラ坂を登つたか知れない。

×

小學校から小樽商業に移つて、私の所謂丘の生活が初つたのだ。あつち、こつちに、二、三軒づゝ家屋の散點するこの頃の緑町なんては、實に淋しいものだつた。第四寄宿舎の近邊なんかは數へる程しか家がなかつた。今のマッキンノン先生の宅から高商通りに出た左側には、大きなさくらんぼの樹が二十數本もあつて、いつも五月の末から六月にかけて、一齊に白い花を咲かせたものだ。そしてその樹のかげの方には植物園があつた。こんな時分、ものさくらんぼの白い花の下を私はいつも、センチメンタルな感傷と情緒にひたりながら、小さの夏服を着て往き來したものだ。そして又それが、眞夏になると紅いつぶらな實を結んで、若い私達の味覺をやたらに誘惑したものだ。斯うして夢の様な平和な少年の日が進むに連れて、私達から此の懷んぼの樹が奪はれ、靜寂が奪はれて、街の空氣がだんだん丘にまで浸潤して來たのだ。

×

校庭（小樽商業の）で體操をしてゐると、よく高商のアニマル（其の頃高商の生徒を私達は斯う呼んでゐた）達が、海に面した土手の傾斜にのさばつて、青い煙草の煙をふきかけ乍ら、「氣を付けッ」と大聲で私達の教師の眞似をした。そうすると山火事（體操の教師のアダ名）が烈火の様に憤慨して「この蠻大坊主奴！」と、罵り返した滑稽も思ひ出される。

商業學校時代も過ぎて高商へ入つた私は、又、此の緑が丘に縛付けられたわけだ。或る者は立派なオーバーコートを着た高商生、又は一文字を被つたりする滑稽な、其の頃私達にひどく大人くさく見えた高商生に、斯うして私もなつてしまつた。今色々な事を考へて見ると私はさても淋しい氣がする。それ程總ての事の渝り變れが早い。然し、それだけ又、丘、この緑が丘は私にとつて懐かしい。雨の日も風の日も、そして雪の日も登つて來て又下りて行く私も、やがて此の丘の日に、生活に別れけなければならない。

×

長い間、同じ道を通學する毎に逢つた人達も此の幾年間の内にスッカリ變つてしまつた。だがそれらの名も知らない人々は、私の記憶にある限り、此の緑が丘と共にいつまでも親しく私に思ひ出されることだらう。（六月二十五日）

桐のはなによせる

岸保彦

たそがれの空へ旅愁をおくつて
いつぽんの桐を愛撫する。

記憶のうすろいだ墓碑銘が
一つ一つの小さい花となつて
みんな「過去」と咲いてある。
平坦な畠がめぐり
うすむろさきのはながいつぱい
に咲きみちて
夢にみた風景である。
昨日のひとよ
私はさみしい旅びととなつて
桐のはなをながめてゐる。

晩春

矢島篤一

わけもなく、遠く春の戀歌に心を惹しつけられる宵でした。蒸する様なトタン屋根の二階を逃れる様にして降りた私は、公園通りを歩いていました。夕方までの春風は忘れた様になくなつて、すつかり撒水された道路は、生ぬるい空氣のなかに一脈の涼味を與へていました。まだ宵の口でしたけれども、二三日來の急な暑さのためか、明るい街燈の下を、若い人達が澤山アベックで歩いていました。いつか私も、可なりみすぼらしい自分の姿を氣にし乍ら　花やかに着飾つたこれらの人の間にまじつていました。兩側に並んでゐる夜店は、人々にふさはしい様々の衣裳を飾つて、散策の足をとめさして居りました。

私は立つともなく一つの花店の前に立ちました。其處には色々の草花がをかれてありました。鈴蘭や勿忘草やチウリツプなど白いが鮮かに、私の知らない花草が澤山ありました。「いづれも、陽商の氣分にぴつたりしていました。その中でも、ヘスの光を受けて、ほんさうに美しく見りました。わけてクリムズンのチウリツプは女の心臓の様に鮮かに私の心に映りました。」私は小さな鉢に植えられた草花に眼がひかれました。つゝましいラベンダの花をつけたその草は、私のくにで「みしらず」と云ふ花によく似ていました。けれども、花も葉もはるかに可憐でした。私はつゝましやかなその花にたまらない愛着を感じました。私の窓の硝子一つの裝飾である鈴蘭がいつからかあかくなつているのを思ひ出しました。

私は乏しい私の懐を思ひ乍らも、その値段を考へて見ないわけにはいきませんでした。私の傍の箱に腰をかけて、雑誌を讀んでいる十二三の少女に聞きました。「これは何んと云ふ花ですか？」心もち俯向き加減に、雜誌を手にした彼女は默つています。花を賣る時をも忘れて、無心に讀み耽つている後ろ姿に私のそばに居た何處かの奥さんらしい人がクスリと笑ひ出しました。他の二三人の人も誘はれた様に微笑しました。今一度呼びかけようとした私はそのまゝ默つて了ひました。

手にしているのは古い少女雜誌らしく、開かれた一方の頁には、何か色彩された繪が描いてありました。お伽噺でも書いてあつたらしいです。

私は色の黒い健康そうな姿を見下ろし乍ら、南の國の花賣る乙女の胸にも描かれてあるだらう幻想的な物語の夢を思つていました。

ふと氣がついた時には傍の人は最う居ませんでした。少女は何も氣つかぬらしいもの如く雜誌に眼をさしていました。

私にはこの貧しい少女の夢を破るために再び呼びかける勇氣はありませんでした。

悲しい事でもした後の様に其の場を逃がれた私の心は、一種寂寥に近い悲哀さで一ぱいでした。四五分の後、私は別な花屋から同じ花を二十錢で一鉢求めました。そして「アルメリア」と云ふのがその花の名である事を知りました。（二六、六、九）

蝴蝶哥哥

太田英治

蝴蝶哥哥
你愛些什麼？
蘭花妹妹等着你
等你快來看看她。
若是你去看見她
她必定要歡喜了。

悲しき女王

眞砂緒

新緑の香が溶けて居る樣にさわやかな、しつとりとした月の光が窓硝子を通して部屋の中に注いで居た。其の部屋の中で、光子は夢を見て居た。

――海の中の小島は緑に包まれて、清い泉が湧いて居た。其處にはしめやかな匂が漂つて、花だか匂だか明らかでなかつた。木の下には浮山の處女が集つて美しい談をして居た。其の島には男は一人も居なかつたので、女は全く自由であつた。其處には男の勢力は少しも無かつた。多くの處女等は夫々夢の女王を自ら守つて居た。光子は其の島の中に默つて佇んで居た。するさ、知らない女がやつて來て。

――何を考へて居る？

さ、訊いた、

――妾、男の勢力に堪えきれないの。

――妾の憧憬は。何だか譯が分らないけれさ、もう失はれてしまつた樣な氣がする。妾は名も知れない國を求めて居る。

――貴女も變ね。此處は自由の國です。男の暴力は海の彼方。妾達は處女。妾達は夫々樂しき女王なのよ。憧憬は何時も海から昇るお日樣のやうに輝いて居る。

――さあ、妾達の仲間にお這入りなさい。

――あゝ、妾は……。

――樂しい女王の仲間におなり。

――けれど、けれど妾は……。

光子は、微かな自分の溜息で、ふと眼が醒めた。彼女の瞳は涙でうるほつて居た。

――まあ、月の光が。……妾、どうしてあんな夢を見たのだらう。

斯う云つて、光子は、ほのかに顔を赧らめ乍ら、頭をあげた。

まだ夫は！

ふと氣が付いて見ると、夫は未だ歸つて居なかつた。もう十一時過ぎでもあらう。彼女の心持は、何時もの事乍ら、急に暗くなつて來た。月光の流を浴び乍らすやすや眠つて居る今年二歳になる女の兒の顔を見た時、彼女の心持は更に淚ぐましくなつて來た。

――夫の心持は何故變つてしまつたのだらう。

勿論、光子は夫を憎んで居る譯ではなかつた。彼女は男と云ふ者を憎らしく思つた。そして、時折は、夫の蠻性に凍じがつた。彼女は妾にあきたのだらうか、と思はぬでもなかつたが、其んな事は考へるのさへ恐しい事であつた。然し、近頃夫は何故晩く歸るのだらうか。彼女は暗涙ぐむばかりであつた。それにしても初めて夫に會つた頃、あの部屋、あの楓、あの月の夜の散歩。

――何と云ふいたましい記憶！

光子は眼を閉ぢた。閉ぢた眼からは淚が落ちた。

然し乍ら、光子は不思議にも夫を憎む事が出來なかつた。或る時は、苦しい生活に、敢然ある夫の仕打に堪え兼ねて、子供を捨てゝ家を出ようと思つた。けれども、彼女は其んな事の出來る女ではなかつた。

此の時丁度夫が歸つて來た。そして光子が起きて居るのを見るや否や、酒臭い息をはき乍ら、

――何して居る！

さ、激しい語で訊いた。

――……………。

――………。

――泣いてるな？

――馬鹿。

――貴女も餘りだは。何時も何時も。

――分らない奴だね。始終言ふ通り、自分を生かさうとする此の人には、女なんか……。其の爲な苦しみを分らないのか。

――でも、操り……。

――犧牲にされても仕方のないことだ。

――然し、愛情までも。

――もう、うるさい。俺は寢る。

斯うした會話の交はされる事は今夜始まつた事ではなかつた。時には、夫は、可愛想だら一緒に居てやるのだ、さ云ふ事もあつた。女は何故に夫を、否男を捨て切らないのだらう。分を育てる勇氣がないのだらう。さ思ふと、今夜も光子は悲しい舞踏を続けずには居られなかつた。

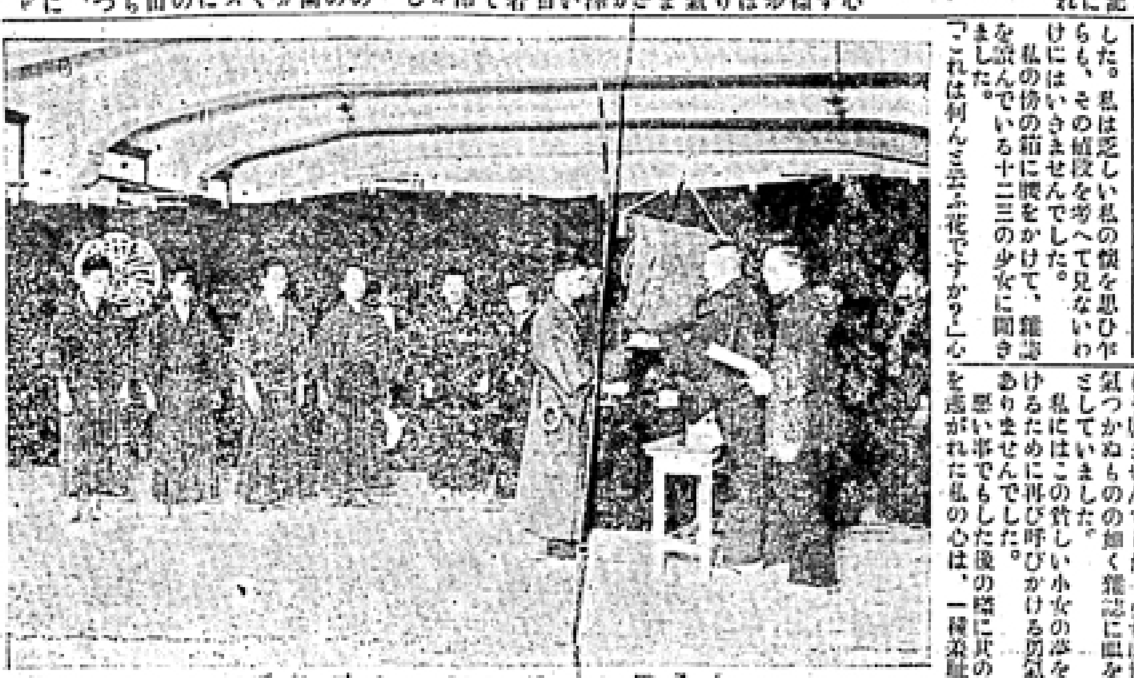
光子は堪えかねて外へ出た。外はしつとりとした月夜の自然が默想に耽つて居た。

ふと、彼女は淋しさの激しい衝動に驅られた。

――そうだ。妾にも見知らぬ、然し乍ら大きな憧憬があつた。そして、其れを破つたのは男、憎らしい男！　際の分らない憧憬。そして彼女は突然さつきの夢を想ひ出した。

――おゝ、男の勢力のない島。あの女王達。人々は、男の卑しい力を知らない悲しい女王だ。ら。然し、然し妾こそ悲しい女王。しい女王達。妾がこそは、あの島の樂しい女王達。妾こそは、悲しい女王だ。

彼女は、月光の流にぬれ乍ら、青草の上に伏したまゝ暫く動かなかつた。（二十五、六）


（全道大[illegible]に撮影せる弓道部）

卅八號會誌 原稿募集

今年は新聞の方の經費を極力節約して會誌を九月と一月とに必ず發行する計畫を立てゝ居ります。從來の事實を見ますと會誌の内容は殆ど在校生に限られて居りますが假令會誌の名が校友會々誌でありましてもその内容に卒業生諸氏の研究論文文藝作品を載せることに些しも不合理はありませんから奮つて御寄稿あらんことを希望致します。

一、研究論文
一、文藝評論
一、創作、戲曲
一、短歌、俳句
一、詩、小曲

募集原稿は右の種類に止めます。原稿〆切は八月末日とし、校友會編纂部宛に御送附下さい

編纂部

谿底の濕り

佐々木妙二

水飲むとわがくだり行く谿路のこゝの細路濕り深しも

谿底の路に八手草わけ行けば草鞋は冷たく濕れ徹りたり

谿路を曲り曲りてくだり行けば底の草間に清水湧きゐる

谿底の青葉がくりに湧く清水汲み澄りたりその葉うつりて

谿底の清水湧く邊は濕り深し草の蔭徑を敷きて歩るも

米を藏ひ生ふるから松脂り映ゆれこの谿底は日影さゝかず

谿行けば谿の濕りに濡れし草鞋いつしか重くわれは歩むも

文藝消息

同人の異常な熱心によつて北方文藝は目醒しい發展を爲しつゝある。而し外來原稿？なるものを多數載せる事は如何なるものか。

× ×

高商短歌會は會員の眞面目な精束に因つて第五回の集りを重ねた。年末には會員の詠草全部を集めて立派な記念歌集を作る由。

× ×

緑丘映畫協會は最近新たにドラマリーグなる新團體を拵へて從來とは別種の演劇運動を始めた。一般に注視されて居る。

× ×

今秋の外語大會に就ては最早々々に夫々の思ひつきがあるらしい。それにしても當局の方針をもう少し緩めて貰へぬものか。三年間の緑丘生活に一度位華やかな外語大會の思出を持ちたいではないか。

◉編輯私語

八月九月は發行を休む。その代り九月には會誌を發行する。原稿が集らなければ出來ぬ相談だが研究論文文藝作品何でも好い。澤山御寄稿を願ふ。

故人の御遺族から

拜啓貴會益々御隆盛大賀の至りに御座候陳者舍弟吉雄逝去に際しては御叮重なる御弔詞を被下遺族にとり此上なき次第に御座候茲に御禮申上候實に此非才にして他界の客と相成候は只天命とは申せ實に痛惜に堪ぬ次第に御座候同人の發病其他に付き御報告せよとの思召に有之候入院私事其儀風邪引にて引籠り居候爲め同人の親友に出張相願候醫術等は更に不案内に御座候へ共親友より承り候儀を申上候同人昨秋以來中耳炎にて療養仕居候處兎角病勢一進一退にて過ぎしも意を決し徹底的に療養すべく四月上旬より鐵道會社は欠勤只管療養せしに四月下旬より發熱兎角解熱せぬ故同人も帰宅せしも如何せん病因更に不明候處五月七日頃より腦膜炎症狀を感じ遂に檢血を御願ひせし處豈計らんや中耳炎の傷口より惡性の黴菌血管に浸入血液は腐敗し茲に敗血症たるの病症を見出されしに從ひ百方手を盡せしも遂に九日午前五時三十四才を最後に黄泉の客と相成申候同人の日々斯の如き大患なるに於て死なるものを自覺し私事の後事を託し瞑目せしは山に海にして斯の如き平凡なる往生せしは全く高等の學府にて修めし賜物と人樣に御禮申し述べ候は少々私の總安に相成申候何卒折角の御厚情に依り先達も不關御相申上候後一入御會の御隆盛を祈る次第に候　不一

石田里

小樽高等商業學校同窓會御中

◎同窓會々員異動

氏名	卒業年次	勤先及住所
井本二郎	5	勤先 北海道夕張郡栗澤村字万字北海道炭礦汽船株式會社万字礦
直島一郎	14	勤先 小樽市北海道廳立小樽商業學校
佐々木憲二	14	勤先 靜岡縣熱海町福田　岡田材木店
相澤正美	11	勤先 大阪市大阪外國語學校 現住 兵庫縣武庫郡今津町字長洲二、四〇番地
松林右桂	14	勤先 長野市西後町六十三銀行本店 現住 同　上
宗村[illegible]	[illegible]	勤先 樺太[illegible]　安田方
田中繁貫	12	勤先 東京市丸ノ內海上ビルディング內[illegible] 現住 [illegible]
川島修治	14	[illegible]
淺[illegible]源一	13	[illegible]
梅原剛陽	13	[illegible]
布施[illegible]	9	[illegible]
盛田瓊	10	[illegible]
木谷利治	13	現住 東京府下西大久保一一〇　髙橋野義方
太刀川利男	11	[illegible]
植木榮	14	[illegible]
杉山昌作	11	勤先 大連市敷島町九番地　水谷商店
吉川勇	6	[illegible]
谷村義三郎	13	現住 岡山縣上房郡高梁町本町 現住 東京府下大森町新井宿一、〇五〇番地
大木弘恭	13	現住 東京市外東中野一、六一九番地　小島方
武内治一郎	9	勤先 神戸市榮町一二三[illegible]會社神戸支店 現住 兵庫縣明石郡垂水村字西垂水八番地
穴釜外八	12	[illegible]
武田秀雄	9	現住 札幌市北五條東四丁目一番地
關根泰三郎	7	勤先 東京市丸ノ內　三菱合資會社
鹿島義臣	12	[illegible]
岡田宜治	14	[illegible]
成田傳夫	14	[illegible]
小關勇	11	勤先 札幌市北一條西[illegible]丁目
樋泉守正	12	[illegible]
伊吹健治	14	[illegible]
門島間	10	[illegible]
大槻文比古	14	現住 神戸市[illegible]
松岡俊一	11	[illegible]
三尾谷規矩	12	[illegible]
北山辰彦	14	[illegible]
鈴木孝之	15	[illegible]
森[illegible]雄一	15	[illegible]
今熊正一	1	現住 大阪府[illegible]
山田稔	13	勤先 東京市麹町區內山下町一丁目日本勸業銀行
下條貞秋	10	現住 東京府下中野町桃園三、二八五番地
桝澤久之	8	[illegible]
今野吉之助	11	現住 神戸市[illegible]
佐々木興	11	[illegible]
大阪房男	15	[illegible]
小林榮一	14	現住 小樽市[illegible]
金井彌巖	10	[illegible]
高橋次郎	12	[illegible]
相貝正二郎	15	[illegible]
榊原義英	13	[illegible]
渡邊熊吉	7	現住 小樽市[illegible]
澁谷綱紀	13	[illegible]
間宮清一郎	14	[illegible]
林源太郎	4	勤先 神戸市[illegible]
桑野秀次郎	15	[illegible]
山田稔	13	[illegible]
町野勳	13	現住 小樽市花園町西四丁目
中村宏夫	15	勤先 東京市日本橋區[illegible]
志賀忠次郎	15	現住 [illegible]

◎同窓會々費納入報

一金壹拾圓也　大竹作平君　太田利隆君
以上一時拂
一金拾九圓也　宮崎吉利君
一金拾八圓也　福原昌藏君
一金拾參圓也　飯東虎市君
一金拾貳圓也　吉尾友太郎君　竹虎男君
一金七圓也　後藤知三君
一金六圓也　廣川佐太郎君
一金[illegible]圓也　阪澤捷治君
三澤秀藏君　小澤文三君
榊原常次君　小泉宗喜君　中田新平君　高和登次郎君　山田師治君　地主忠雄君　吉田青治君　村上武夫君　鈴木正男君　市川靜夫君　佐竹佐武一郎君　林俊一君
高橋三吉君　奥村金治君　泉山箱吉君　大久保安一君　長尾五文一君　齋藤光治君　杉山昌作君　大竹吉平君　二瓶政一君　松浦[illegible]君　乙村[illegible]一君　豊口二郎君

品質優良
價格低廉
上製カレチソープ
並製 萬石石鹼
粉米石鹼
棒洗濯石鹼
小樽高等商業學校
全學會販賣部
石鹼工業製造